

機関番号：32688

研究種目：基盤研究（c）

研究期間：2007年度～2010年度

課題番号：19520204

研究課題名（和文）近代同性愛アイデンティティの成立とワイルド裁判の歴史的位相

研究課題名（英文）A study on the construction of modern homosexual identity and the historical dimension of the Wilde trial

研究代表者 宮崎 かすみ
(Kasumi Miyazaki)

研究者番号：10255200

研究成果の概要（和文）：近年大幅な見直しが進んでいる十九世紀後半のイギリス同性愛史の最新研究成果の全体を渉猟した上で、研究者を招へいし、日本に広く紹介した。この知見に基づき、オスカー・ワイルドの文学について、同性愛をめぐる思想史の文脈から分析して明らかにした。これに並行して、この時代の英文学に特有な、同性愛タブーを背景としながらもそのなかでも根強く存在した同性愛文化に、同時代の英文学者、夏目漱石が大きく影響を受けたことを明らかにし、この成果を書籍にして刊行した。また英語圏で発表を行ったり、論文集に寄稿するなどして、漱石の代表作『心』とワイルド、聖書の関係性を英語圏に広く紹介した。

研究成果の概要（英文）：In this project, first, I thoroughly surveyed the recently published books on the history of the latter 19-th century homosexuality in Britain. Secondly I introduced new knowledge of it to Japan by way of publishing a book review and of inviting a leading scholar into Japan. Backed by this contextual study, I analyzed various works by Oscar Wilde in the light of a history of the contemporary ideas concerning about homosexuality. Along with this, I discovered that Soseki Natsume was so much influenced by the peculiarly homophile milieu of the English literature of the day.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：英文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：オスカー・ワイルド、同性愛、アイデンティティ、ソドミー、性科学

1. 研究開始当初の背景

近代的権力による規範的社会において、中流階級を作り上げる要因となったナショナリズム、リスペクタビリティ、セクシュアリティなどの概念装置の発達にとって、その反対の極をなす「他者」の創出と排除は極めて重要な要素であった。とりわけ国民国家は、均質な国民を前提として成り

立つイデオロギーであったため、国民たる資格を持たない者らを排除するという力学を内在させていた。また、リスペクタビリティという中流階級の定義づけに使われた規範は、中流階級として相応しい身体の雛形を提示したが、これが個人の身体、特にセクシュアリティを管理する近代的権力の行使の重要なチャンネルとなった。

19世紀以降においては、「他者」は遺伝の道筋に乗せられ、差別の身体化・人種化とも言われる現象が進行するが、これに大きく寄与したのは精神医学に端を発する変質論とその後のダーウィニズムである。これらが結託してヨーロッパの内部に人種的他者を創出する学問知を構成し、法律への違反という従来のカテゴリーとは異なる、進化を妨げるという意味での逸脱者を創出した。こうして異人種、性的倒錯者、精神病患者、犯罪者などが中流階級の規範の反対項を構成するものとして編制され、しかもそれらが相互に繋げられる学問的布置が成立する。

こうして編制された規範的秩序の中で、同性愛はまっとうな男性性に対する究極の負の要素として忌避されながら、ホモソーシャル性の強い当時の社会にあってこのホモソーシャルとは不可分な要素として偏在していた。同性愛という問題系が研究対象として有意義であるのは、衛生という観点から個人の身体に検閲的に行使された近代的権力の特質がここに十全に発揮されるからである。こうした権力の究極の目的は、個人の身体の内奥に潜む異常な性欲を見透かすことだった。性欲こそ真の自己と見なされていたからだ。

近代においてこれほど重要な同性愛の問題系であるが、資料的困難さが付きまとい(犯罪であったため資料が残らない)その歴史的研究は十分になされていない。肛門性交を意味するソミーという従来の用語は、行為のみを意味していたのに対して、近代的概念である同性愛は、主体の本質的性質をも特定する用語である。この概念の成立によって、同性愛者はフーコーが言うように、一種の種族、人種とされ、同性愛に対する本質主義的な理解が広がることになる。この近代的同性愛概念成立におけるワイルド裁判の意義を決定付けたのは、*Talk on the Wilde Side*(Ed Cohen, 1993)であり、また当時 Joseph Bristow もこれに追随していた。この研究は、批判の多いフーコー・テーゼ(同性愛概念が成立するまで男性間性交を特定する概念がなかった)を無批判に受け入れて、同性愛者に *effeminacy* という含意が結びついたのはワイルド裁判においてであると主張し、同性愛者という主体のアイデンティティを構築する概念が成立した契機としてのワイルド裁判の意義を強調した。しかしながら、当時は少しずつフーコー・テーゼに対する批判的研究が発表され始めており、本研究は、これらの問題を歴史的に検証する必要性の認識によって動機づけられた。

2. 研究の目的

同性愛概念の成立の歴史的過程を辿り、それに対して、オスカー・ワイルドという文学者、およびワイルド裁判が果たした意義を歴史的・思想的に検証することが目的であった。それを通して、フーコーが言うように、ワイルド裁判の時期まで、当事者のアイデンティティに関わる同性愛という

概念が、本当にイギリスに存在していなかったのかどうかを明らかにすることを目指した。その際、歴史研究ではカバーしきれない当事者の心性 - 同性愛概念への懐疑、抵抗、受容、加担 等の問題を補うために、文学テキストの読解、およびワイルドの伝記的研究を展開しようとした。

1) 19世紀後半のイギリスにおけるワイルド裁判の意味を歴史的に検証する。その上で、それまでに同性愛アイデンティティが存在しなかったというフーコーの説の見直しをする。

2) 同性愛アイデンティティの創出と人種概念の交錯の検証。

ワイルドという最初の同性愛者のイメージが、不思議なほどアイリッシュネスとは結びついていない。これはなぜか。この時代にはセクシュアリティとは人種化された概念だった。ワイルドのケースはこの傾向に適合しない。この、同性愛とアイリッシュネス、もしくは人種の関りは歴史的な検証の必要がある。ワイルドの作品にその結合を認められるが、これを手がかりとして歴史的に検証する。

3) 同性愛者の側からのアイデンティティの創出。

被差別のカテゴリーがつけられるときに、近年指摘されているのは、そのカテゴリーが権力の側から一方的に創られるだけではなく、被差別の立場にある人たちが自ら加担して創り出してもいる、という点である。同性愛というアイデンティティ創出においてもこの傾向があると思われる。それがワイルドの過度な自己演出やダンディぶりなどではないか。この点を文学研究から出発して、歴史的に検証する。

4) ワイルド周辺の英文学的環境における同性愛アイデンティティ。

19世紀後半の英文学という環境は同性愛研究にとっては宝の山であり、この分野の浩瀚な研究・分析を抜きにしては、近代同性愛の全容の解明は不可能である。最近アディントン・シモンズの回想録も刊行されたが、英文学者の周辺には幸運にも資料が残されており、資料の乏しい同性愛研究にとって英文学の環境は歴史的にアプローチ可能な特権的領域である。彼等の周辺に残されている文学テキスト・書簡・日記などの一次資料や伝記、さらにセクソロジー関連文献やジャーナリズムなどを駆使して近代同性愛概念の立ち上げを歴史的に検証する。当然シモンズ等の文学者とエリス等の性科学者の協力関係も視野に入れる。

5) ドイツ、アメリカ、および日本などとの思想の交流の検証。

同性愛概念は国境を越えて盛んに研究や意見の交流が見られた。特にドイツでは同性愛の新しい学説が盛んに発表されており、ドイツとイギリスでは思想の伝播が見られた。またワイルドはアメリカに講演旅行をしたし、エリスの著作はアメリカから刊行されていた。これらの相互交流を調

べる、近代的セクシュアリティの成立史を明らかにする。

3. 研究の方法

2の1)については、研究課題遂行中にイギリスの歴史研究者が相次いで、フーコーに批判的な新知見を次々と発表した。本研究課題の着手時は、本国イギリスでも、同性愛史の書き換えが進んだ時期であり、Sean Brady, Mat Cook, H.G. Cooks, らが新機軸を打ち出しつつあった。なかでも、Sean Bradyの *Masculinity and Male Homosexuality in Britain, 1861-1913* (2005) は、フーコーとそれに基づくジェフリー・ウィークスのこれまでの定説を歴史的資料に基づき、真っ向から反駁した画期的な研究であった。本研究課題では、陸続と刊行された最新の研究書を読み進め、成果を取り込んだ。

2の2) 3)については、ワイルド作品の文学的読解とともに、ワイルドの伝記・評伝などを読み込んで、ワイルドの作品に現れている先見性やポスト・モダン性に対して、ワイルド本人がどれほど自覚的であったかを探ろうとした。

2の4)については、特に近年再評価の機運が著しいジョン・アディントン・シモンズの評伝や『ルネサンス研究』などを読み進めることで検証しようとした。

2の5)の日本との影響関係については、本研究課題が扱う時代に重なり、英文学者でもあった夏目漱石の作品を分析・解読することによって、達成しようとした。

4. 研究成果

本研究課題が目的として掲げていた同性愛アイデンティティについての歴史的検証作業は、本研究着手時点で、本国イギリスの歴史研究者による見直し作業の成果が陸続と刊行されつつあるところであった。よって、本研究課題は、それらの成果を取り込んで、日本の研究者・一般の人々に広く紹介することに努め、当初の研究計画に掲げていたことから一歩踏み込んだ研究に取り組むことができた。

具体的には、以下の方法によって日本にイギリス同性愛史の最新成果を紹介した。まずブレイディの研究を『ジェンダー史研究』において書評を執筆して、英文学を超えたジェンダー史の研究者に、これまでの研究史のまとめを踏まえつつ広く紹介した。さらにBradyを日本に招聘して(本研究経費からの支出ではない)横浜国大において大きなシンポジウムを開催し、宮崎が司会を担当した。このシンポジウムは、前半に日本の性的マイノリティの4人のパネリストが自らの経験を語り、後半でBrady氏の講演をするという形

式を取ったが、特に前半のパネリストに著名な人物が含まれていたこともあり、日本全国から研究者が集まり、セクシュアリティ・ジェンダー研究においては画期的かつ伝説的なシンポジウムとなった。この模様はユー・チューブにもアップされ、多くの人に閲覧されている。英文学のみならず、社会学・歴史学などの研究者および一般の人々に対して、性的マイノリティの存在、およびその歴史的問題について多くの問題を考える機会を提供することができた。

ブレイディ氏は、ジェンダー・セクシュアリティ研究において世界の学会をリードする立場にあり、彼との研究交流は本研究課題に大きな成果をもたらすことになり、現在に至っている。特筆すべきは、本研究課題の視点を明治期日本に当てて行っている研究について、ロンドン大学パークベック校が主催した国際的マスキュリティの学会において研究を発表する機会を得たことである。じつはこの筋の漱石研究は、当該研究の傍流から派生して研究期間中に書籍を刊行するなどして最も大きな成果を挙げたものであるが、今回この学会は、宮崎にとって初めての本格的な国際学会であり、世界のマスキュリティ研究を牽引するジョン・トッシュ氏との知己を得たり、また最新の成果を競い合う国際学会特有の雰囲気味わう貴重な機会に恵まれた。さらに、漱石文学そのものは日本以外ではあまり知られておらず、しかし日本近代文学の確立に中心的役割を果たした漱石において、オスカー・ワイルドと聖書の言語が近代日本男性の主体形成に大きな影響を与えたとする本研究発表の知見は、聴衆に大きなインパクトを与え、高い評価を得ることができた。本研究発表は、50本近くに及ぶ研究発表の中から優れた発表として選ばれ、大幅に加筆した論考がパルグレイブ・マクミラン社から刊行されているジェンダー・セクシュアリティシリーズの一卷(*What is Masculinity?*)に所収されることとなった。この書は2011年7月に刊行予定であるが、ジョン・トッシュ氏が巻頭論文を執筆し、古今東西のマスキュリティ史研究の最前線が結集した近年で最も重要な書物となることは間違いなく、この書物の一角に参加することができたのは、本研究課題にとって大きな名誉であった。また同年9月にロンドン大学にて刊行記念シンジウムの開催が予定されており、宮崎もこれに招待され、出席する予定である。このようにロンドン大学パークベック校およびブレイディ氏との研究交流は軌道に乗り、2011年1月にも別の研究経費から氏を日本に招聘してマスキュリティ史の総括的研究やジョン・アディントン・シモンズの伝記的研究についての知見を得ることができた。これは一般にも開かれた国

際フォーラムとして開催されたが、英文学研究者が出席し、活発な意見交換がなされた。ブレイディ氏は気鋭の歴史研究者であるが、歴史家の立場からの同性愛研究と、当研究課題のような英文学をベースとした同性愛研究のコラボレーション的研究は日本では例がなく、本研究課題のみならず出席した英文学研究者にとっても、大変貴重な機会となった。

研究目的3の2)、3)、4)の課題については、ワイルドとペイタの論考を通して深く追求することができた。特に両者を取り巻く英文学環境の同性愛の問題を、文学作品の分析をベースにしながも文学研究の枠を超えて、思想史的な文脈に位置付けることができた。本研究課題は、期間中にいくつもの本の形で研究成果を刊行してきているが、それらはいずれも英文学研究の枠組みではなく、ジェンダー・セクシュアリティ研究やマイノリティ研究として一般読者に向けて発表してきている。その結果、英文学研究者を超えた多くの読者を獲得し、同性愛研究一般における本研究課題および英文学的学問知の蓄積が小さからぬものであることを広く一般に知らしめることができた。とりわけ宮崎が編者を務めた書籍、『差異を生きる』では、ワイルドの思想研究から同性愛の問題を論じ、広く思想史の文脈にこのテーマを架橋し、英文学研究の多様性・可能性に改めて目を開かれたというコメントを編集者からもらった。本研究課題が追求していた、同性愛アイデンティティの問題をワイルドなどの英文学テキストの分析を通して、歴史・思想史に架橋するという課題は、概ね達成できたと自負しているところである。

ワイルドの思想性を作品から解釈するばかりでは実態からかい離する恐れがあるとの反省から、研究期間後半からはワイルドの実人生から思想性を探るために、ワイルドの評伝執筆の準備をしてきた。残念ながら研究期間中に脱稿することはできなかったが、2011年中の刊行を目指して鋭意執筆中である。これも新書で刊行する予定なので、専門的知見をできるかぎり一般人に読みやすく書くための努力をしている。

本研究課題では、イギリスの学会に参加したりと、最先端の研究に関わりつつも、それをできるかぎり英文学の専門から解き放ち、ジェンダー・セクシュアリティに関心を持つ人々を始めとする一般読者を想定して、研究成果を公表するよう努めてきた。成果の一つである単著、『百年後に漱石を読む』も東京新聞に著者インタビューとして紹介され、さまざまな方面から反響があった。交付期間中に、多くの実績を上げることができ、それなりの責任を果たせたのではないかと自負している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

Kasumi Miyazaki, /Construction of Samurai Masculinity in Modernizing Japan : The Influence of Christianity and Oscar Wilde on Soseki Natsume's *Kokoro*, 『和光大学 表現学部紀要』第11号、2011年、pp.221-230.

宮崎かすみ、漱石の俳句と英文学、『壺』566号、2010、12-14.

宮崎かすみ、変質論とダーウィニズム 『ジェイン・エア』から『ドラキュラ』へ、「内なる他者」表象の変遷、『英語青年』(査読なし)154巻、2008年、562-565.

宮崎かすみ、赤い椿と吸血鬼 スパークマティック・エコノミーから読む『それから』 『横浜国立大学教育人間科学部紀要』(査読なし)No.10、2008年、34-44.

宮崎かすみ 「『宝島』におけるマスキュリニティの抗争 抑圧された女性性の表象としてのシルバー船長」 『中部英文学』 [査読なし]第27号、2008年、31-35.

宮崎かすみ、ペルセポネと透明性の美学、『ペイター論集』(査読有)2007年、33-47

宮崎かすみ 「Masculinity and Male Homosexuality in Britain 1861-1919」(書評) 『ジェンダー史学』 [査読なし]第3号(日本ジェンダー史学会)、2007年、124-129.

宮崎かすみ、白百合の香を嗅ぐ 『それから』における同性愛表象、『横浜国立大学教育人間科学部紀要』 [査読なし] No.9、2007、60-75.

[学会発表](計3件)

MIYAZAKI, Kasumi, "Praising Samurai-Masculinity by way of the Biblical Language: The Influence of Christianity and Oscar Wilde on Soseki Natsume's *Kokoro*", "WHAT IS MASCULINITY? HOW USEFUL IS IT AS A HISTORICAL CATEGORY?", 2008.5.13, Birkbeck College, University of London.

宮崎かすみ 「『心』と聖書 「贖罪の血」と男性間エロスの継承の神話」 日本英文学会北海道支部 第53回大会、2008年10月15日、北海道大学。

宮崎かすみ 「海賊は女だった? 『宝島』: マスキュリニティの構築と他者の排除の物語」 日本英文学会中部支部、年次

大会シンポジウム、 2007年10月8日、
愛知淑徳大学。

〔図書〕(計6件)

Kasumi Miyazaki, 'Valorizing Samurai Masculinity through the Biblical Language: Christianity, Oscar Wilde, and Natsume Soseki's novel *Kokoro*', in eds., John Arnold & Sean Brady, *What is Masculinity? Historical Dynamics from Antiquity to the Contemporary World*, Palgrave MacMillan, 2011, pp.480.

宮崎かすみ、他、国文学年次別論文集・近代 2008 (平成20) 朋文出版、2011。

宮崎かすみ、他、国文学年次別論文集・近代 2007 (平成19) 朋文出版、2010。

宮崎かすみ、百年後に漱石を読む、トランスビュー、2009、pp367.

宮崎かすみ編、他、差異を生きる アイデンティティの境界を問いなおす、明石書店、2009、pp.231.

宮崎かすみ、他、身体とアイデンティティ・トラブル、明石書店、2008、pp.322.

〔その他〕

ホームページ等
なし。

6. 研究組織

(1)研究代表者 宮崎 かすみ
和光大学・表現学部・教授
研究者番号：10255200